

PRESSBOOK

Hernan BAS

Bijutsu Techo

March 2018

美術手帖

第1066号 2018年5月1日発行 毎月1回1日発行 ISSN0287-2218 <http://www.djutsu.press>

BT | 2018.4・5合併号

vol.70 NO.1066

Artist Interview

ラファエル・ローゼンダール

ART COLLECTIVE

アート・コレクティブが時代を拓く

Chim ↑ Pom / カオス*ラウンジ / SIDE CORE / パープルルーム

Rhizomatiks / チームラボ / Ongoing Collective / Super Open Studio NETWORK

THE EUGENE Studio / コ本や honkbooks / 芸宿 / アーギュメンツ

contact Gonzo / 新しい骨董 / hyslóm / オル太 / じゃぼにか

宇川直宏 × 黒瀬陽平 × SIDE CORE
Chim ↑ Pom 最新プロジェクト in 台湾
戦後日本アートコレクティブ史



「異郷の昆虫たち」シリーズを制作中のヘルナン・バスのアトリエ風景 Courtesy of PERROTIN

HERNAN BAS

ヘルナン・バス

物語と絵画を行き来しながら 自身の在りかをキャンバスに描く

キャンバスの中にたたく青年たち。彼らの物憂げな表情と鮮やかな色彩のコントラスト、
繊細な筆致とエキゾチシズム漂う装飾的なモチーフの融合が、鑑賞者の目をとらえる。
日本初個展のために来日した画家が語る、絵画ににじみ出る幸福と、自身を貫く美学について。

島田浩太郎=文 Text by Kotaro Shimada



ペロタン東京にて Photo by Takao Iwasawa

ルナン・バスは、1978年にアメリカ南部フロリダ州マイアミで生まれ、同地のニュー・ワールド・スクール・オブ・アーツで学び、現在はデトロイトとマイアミを拠点に活動を続ける。幻想的な風景の中に妖艶なたたずまいで思索にふける繊細な文学青年のような人物を数多く描いてきたバスは、第53回ヴェネチア・ビエンナーレのデンマーク&北欧パビリオン「ザ・コレクター」展（2009、キュレーターはエルムグリーン&ドラッグセット）に参加するなど、近年ますます国際的に注目を集める。ギャラリー・ペロタンでの個展は今回で6回目となるが、日本での初個展となる「異郷の昆虫たち」展開催のために来日した作家に話を聞いた。

「本展タイトルは、イギ

**これから物語が
どのように展開していくのか。
そのクエスチョンマークが浮かぶ瞬間が
私の作品には含まれています。**

リスの博物学者ジョン・ジョージ・ウッド著『海外の昆虫―その構造、生態と変態の報告』（1874）から着想を得ています。数年前にこの本と出会ったのですが、全体を通して昆虫たちの様子がまるで人間のよう詩的に描写されていることに大きな感銘を受けました。かつて19世紀ヨーロッパでは、ダンディーという表現は（現在のようには身なりや身振りが洒落た魅力的な男性を賛辞する言葉としてではなく）貴族を真似る、軟弱で奇妙な格好の男性たちを称して用いられていました。実際、当時の風刺画で、彼らは世俗から逸脱した怪物のように扱われ、まるで昆虫のように描写されていました。

19世紀デカダン派の作家オスカー・ワイルドやジョリス・カルル・ユイスマンス、フランスの画家

グループのナビ派から影響を受けたバスは、文学的想像力と絵画的想像力のあいだを自由に行き来し、それらの規範となる言語や構造、方法論などを領域横断的に融合、あるいは重ね合わせることで、絵画における「象徴」や「装飾」といったクリシェ（常套句）的なものに新たな生命力を与える。古さと新しさが共生するバスのスタイルはどのようにして生まれたのだろうか。

「最初から現代美術に興味があったわけではない、ロマン主義時代（18世紀末〜19世紀前半）にひかれていました。現代作家に興味を持ち始めたのも、本当にここ5年くらいのお話です。昔、実際にモネが住んでいた場所にレジデンスをさせてもらったことがあります。もともとモネの大ファンというわけではなかったのですが、かつて彼が過ごしたアトリエを実際に訪れ、彼が愛した庭園を歩きながら、時には真夜中にこっそりと部屋か

ら抜け出して、月明かりの下でボートに乗ってみたりしながら、その場所でゆっくりと時間を過ごしたことで、一気に彼の大ファンになりました。私が育ったマイアミの建物は古くても築100年程度ですから、そのとき初めてヨーロッパの古い街並みや建築、庭園の重層的な時間と空間の豊かさを身をもって体感したわけです」。

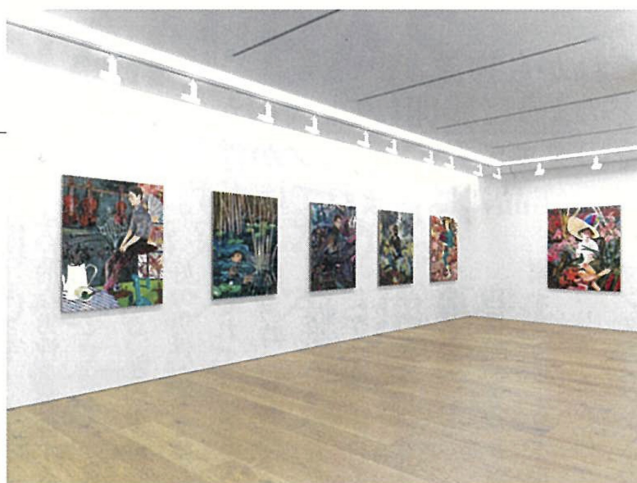
セクシヤリテイを問い キャンバス上で対話する

周辺環境に反応して千変万化するカメレオンの如く、絵画空間のなかで主役を演じる夢虚ろな美青年たち。バスはそうした彼らの様相を「ファッグ・リンボー（Fagg Limbo）少年期から大人へと移行するあいだのどっちつかずの危うげな状態」と呼ぶ。またその奇妙で妖艶なたたずまいは、幼虫から成虫に変態したり、あるいは外敵から身を守るために周辺環境に擬態したりする昆虫たちの身振りを

想起させる。

「自分自身がゲイであるか否かについて、理解しているように理解していないような、そのような『曖昧な時間』をとって魅力的な瞬間と感じています。演劇に例えるなら、インターム（幕間、休止、中断）に当たる部分就是我的作品です。これから物語がどのように展開していくのか。そのクエ

スチオンマークが浮かぶ瞬間が私の作品には含まれています。実際、ゲイの小説でもそのようなシーンが必ず存在しています。そういう意味では古典的なトピックスと言えるかもしれません。それは『目覚める瞬間』のようなものです。また同時に言葉に出さなくてもゲイだとわかるコードやヒント



展示風景。ペインティング9点、ドローイング11点が発表された
Photo by Kei Okano

みたいなものも作品の中にちりばめようとしています。私はそういうした『ファッグ・リンボー』というフェーズをとっても美しいと思っています」。

17年間、幼虫として過ごすセミと、17歳でゲイであることをカミングアウトした作家自身。強い殺傷能力があると思われているが実



左—彼は花を擬態する唯一の種 2017 リネンにアクリル絵具 152.4×121.9cm



右—幾人かの慰めになるような彼のメロディは、うるさい隣人のために 2017 リネンにアクリル絵具 127×101.6cm

HERNAN BAS

1978年アメリカ生まれ。現在はデトロイトとマイアミを拠点に活動。抽象性や詩的な比喩に満ちた作品を生み出す。自身のセクシュアリティをオープンに語り、危うげな青年像を多くモチーフに描いた絵画は、巧みなペインティングと色彩感覚も相まって、各地で高い評価を得ている。近年の主な個展に、2017年「Florida Living」(SCAD美術館、サバンナ)、「House Work」(ヴィクトリア・ミロ、ロンドン)、「Bloomsbury Revisited」(ギャラリー・ピーター・クリヒマン、チューリッヒ)等。

際はそこまでの毒性のないクモと、マスクを被って人を怖がらせる素振りを見せているが実際はそんなに怖くない人物。本来、木の枝に擬態するはずが、何故かまったくカモフラージュすることなく目立つ真つ青な色をしている特殊なナナフシと、ゲイ。聴く人によって美しい音楽に聴こえる場合もあればただの雑音にしか聴こえない場合もあるコオロギの羽音と、バイオリンの音色。幼虫期を4年間水中で過ごし、成虫になった瞬間、水面から顔を出して息を吸って、木をよじ登っていくトンボと、自身がゲイであることを告白した途端、周囲に強くアピール

INFORMATION

異郷の昆虫たち

1月18日～3月11日、ペロタン東京にて開催。1874年に出版された昆虫学の古書籍から着想された新作ペインティングとドローイングを発表。さなぎから羽を伸ばそうとする変態中のチョウや、捕獲するため身を潜めるクモなどに例えた若者の肖像画を発表した。

① 11:00～19:00 ② 日月祝
 東京都港区六本木6-6-9 ピラミデビル1階
 ☎ 03-6721-0687
 🌐 www.perrotin.com

し始めるゲイの身振り。花に擬態するカマキリと、美しく着飾るゲイ。
 古今東西の様々な物語や神話といった想像世界のモチーフだけでなく、現実世界である自然環境の中に生息する生物の変態や擬態に着目することで新境地を開いたパスは、それらをキャンバスの中で象徴性や詩的比喩など文学的かつ絵画的な仕方に対話・融合させることで、妖しさと美しさの同居するユーモラスな作品世界をつくり出す。有機的に連関したトラップが幾重にも張り巡らされたその複層的な絵画空間は、見る者を魅了してやまない。